**聖霊降臨節第10主日　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　2023年7月30日**

**「三日三晩」**

**ヨナ書2章1～11節**

 **2:1 さて、主は巨大な魚に命じて、ヨナを呑み込ませられた。ヨナは三日三晩魚の腹の中にいた。**

 **2:2 ヨナは魚の腹の中から自分の神、主に祈りをささげて、**

 **2:3 言った。苦難の中で、わたしが叫ぶと／主は答えてくださった。陰府の底から、助けを求めると／わたしの声を聞いてくださった。**

 **2:4 あなたは、わたしを深い海に投げ込まれた。潮の流れがわたしを巻き込み／波また波がわたしの上を越えて行く。**

 **2:5 わたしは思った／あなたの御前から追放されたのだと。生きて再び聖なる神殿を見ることがあろうかと。**

 **2:6 大水がわたしを襲って喉に達する。深淵に呑み込まれ、水草が頭に絡みつく。**

 **2:7 わたしは山々の基まで、地の底まで沈み／地はわたしの上に永久に扉を閉ざす。しかし、わが神、主よ／あなたは命を／滅びの穴から引き上げてくださった。**

 **2:8 息絶えようとするとき／わたしは主の御名を唱えた。わたしの祈りがあなたに届き／聖なる神殿に達した。**

 **2:9 偽りの神々に従う者たちが／忠節を捨て去ろうとも**

 **2:10 わたしは感謝の声をあげ／いけにえをささげて、誓ったことを果たそう。救いは、主にこそある。**

 **2:11 主が命じられると、魚はヨナを陸地に吐き出した。**

**マタイによる福音書12章38～40節**

**12:38 すると、何人かの律法学者とファリサイ派の人々がイエスに、「先生、しるしを見せてください」と言った。**

 **12:39 イエスはお答えになった。「よこしまで神に背いた時代の者たちはしるしを欲しがるが、預言者ヨナのしるしのほかには、しるしは与えられない。**

 **12:40 つまり、ヨナが三日三晩、大魚の腹の中にいたように、人の子も三日三晩、大地の中にいることになる。**

**「うめぼしのうた」という何とも味わいのある詩があります。私は今回説教準備をしていて初めて知ったのですが、ご存じの方もおられるかなと思います。随分と昔ですが尋常小学校の国語の教科書に載っていたそうですし、この詩に色々と曲が付けられてテレビで放送されたりしています。最近では介護施設のレクリエーションでも使われているそうです。**

**「二月三月花ざかり、うぐひす鳴いた春の日の　たのしい時もゆめのうち。**

**五月六月実がなれば、枝からふるひおとされて、きんじょの町へ持出され、**

**何升何合はかり売。**

**もとよりすっぱいこのからだ、しほにつかってからくなり、しそにそまって赤くなり、**

**七月八月あついころ、三日三ばんの土用ぼし、思へばつらいことばかり、それもよのため、人のため。**

**しわはよってもわかい気で、小さい君らのなかま入、うんどう会にもついて行く。**

**ましていくさのその時は、なくてはならぬこのわたし。」**

**こういった詩です。人生の酸いも甘いも嚙み分けるではないですけど、梅が色んな苦労をして梅干しとなって用いられる、そういった味わいある人生って良いものだなと思わせられます。**

**「三日三晩の土用干し」夏の暑い日差しの下で長い期間天日干しされる梅の姿と、深い海の中で大きな魚のお腹の中に三日三晩いるヨナの姿は全く別のものではありますが、おいしい梅干しになるためには三日三晩という長い期間が必要なように、ヨナにとって三日三晩という長い期間が必要だったのです。そして三日三晩というのがイエス様の十字架の死と復活に繋がっていくのです。**

**預言者のヨナは神様からアッシリアの首都ニネベに行って神様の言葉を伝えるように召し出されます。しかもその言葉は「彼らの悪がわたしの前に届いている」（1：2）と神様が言われるように、ニネベの人たちにとって非常に厳しい裁きの言葉です。ヨナはそんな大変な役目を負わされるはまっぴらごめんとニネベとは反対方向のタルシシュに向かう船に乗りました。つまり神様から逃げたのです。しかし、神様はヨナを逃がしません。嵐を起こしてヨナが乗る舟は沈みそうになります。ヨナは船乗りたちに問い詰められて自分は天地を作られた神様を信じる者であり、その神様から逃げて来たことを白状しました。ヨナは自分を海に投げ込めば嵐はおさまると船乗りたちに言います。ヨナを海に投げ込むことはヨナの命を奪うことになるので船乗りたちはしたくなかったのですが、ついに観念して「ああ主よ」と天地の造り主なる神様に祈ってヨナを荒れ狂う海に投げ込んだところ嵐がおさまったのです。**

**海に投げ込まれたヨナですが、神様は大きな魚に命じてヨナを呑み込ませました。それはこのまま海を漂っていたらヨナが死んでしまうという神様の配慮で大きな魚に飲み込ませたのです。ヨナは三日三晩魚のお腹の中で過ごします。真っ暗なお腹の中で三日三晩もの期間を過ごすというのはちょっと想像ができませんが、ヨナはお腹の中で色々と考えたのでしょう。自分のこれまでの歩みや預言者としての使命、なぜ神様の言葉に従えずに逃げ出してしまったのかその弱さ、そしてこれからどうなるのか、いつまでお腹の中にいなければならないのかそういった自分と向き合い神様と向き合う時を過ごしたのでしょう。**

**そうしてヨナはようやく神様に祈るのです。三日三晩大きな魚のお腹の中にいてようやく祈るのです。もっと早く祈ればいいのにと思うのですが今のヨナにはそのくらいの長い期間が必要だったのです。その三日三晩しての祈りが3節からの祈りです。**

**「苦難の中で、わたしが叫ぶと／主は答えてくださった。陰府の底から、助けを求めると／わたしの声を聞いてくださった。」こう始まるのです。**

**苦難の中、陰府の底、ヨナは魚のお腹の中をこう表現します。暗く苦しい魚のお腹の中から助けを求めて叫ぶと主よあなたは私の声を聞いてくださったというのです。**

**私はこのヨナの祈りというのはとても自分勝手な祈りなのかなと思います。「あなたは、わたしを深い海に投げ込まれた」（4節）「あなたの御前から追放されたのだ」（5節）とヨナは祈ります。この祈りの言葉を読んでいると「いやそもそもヨナが神様の前から逃げたんでしょ。海に投げ込めと言ったのはヨナあなたでしょ」と言いたくなるような祈りです。まるで悪いのは神様あなたではないかと神様に責任転嫁しているような祈りに思えるのです。**

**でもその祈りが7節後半の「しかし、わが神、主よ」からガラッと変わります。命を救ってくださった神様に感謝の祈りをするのです。この祈りを聞いてくださった神様に感謝の祈りをするのです。そして最後の10節では**

**「わたしは感謝の声をあげ／いけにえをささげて、誓ったことを果たそう。」とまず祈ります。感謝の声を上げて誓ったことを果たす、神様の召しに応えてあなたにどこまでも従います。ニネベに行くことを拒んで逃げだしましたが、あなたとの誓いを果たしてあなたの言葉を伝えにニネベに行きますというのです。**

**そして「救いは、主にこそある。」最後はこの言葉で祈りは終わります。「あなたこそがまことの救い主」と父なる神様に信仰の告白をして祈りを閉じるのです。神様に文句を言うような自分勝手な祈りをしていたヨナが最後には神様こそが救い主ですと祈ってどこまでも神様に信頼し神様に従うのです。**

**そうして11節に「主が命じられると、魚はヨナを陸地に吐き出した。」とありますように神様はヨナの祈りを聞いてくださり、ヨナを陸地に吐き出させます。海の中ではなくて陸地なのです。恐らく地中海沿いのどこかの海辺です。チグリス川の上流にあるニネベまではるかに遠いところです。それでもニネベに続く陸地にヨナは吐き出されたのです。**

**「救いは、主にこそある。」魚のお腹に三日三晩いたヨナがようやく祈った祈りの最後の言葉です。三日三晩してからようやく祈るのではなくて、もっと早く祈ればよかったのにと思います。もっと早く神様に助けを求めて祈ってこの信仰の告白をすればよかったのにと思います。**

**そうは思いますが、この三日三晩というのがヨナにとっては必要な時間だったのです。「三日三晩の土用干し」がおいしい梅干しを作るのに必要な時間であるのと同じです。短すぎてもおいしい梅干しができないですし、長すぎてもおいしい梅干しができないのです。「三日三晩の腹の中」ヨナはこの時があったからこそ神様に祈り「救いは、主にこそある。」の信仰の告白に導かれて神様に従う預言者として豊かに用いられたのです。**

**「つまり、ヨナが三日三晩、大魚の腹の中にいたように、人の子も三日三晩、大地の中にいることになる。」（マタイ12：40）イエス様は三日三晩魚のお腹にいたヨナの姿はご自身が十字架の死によって陰府に下り、そして3日目に復活するその姿を指し示していると言われるのです。ヨナが三日三晩魚のお腹の中にいて救い出されたことが大切な事であると言われるのです。**

**そうやって改めてじっくりと最初に紹介したうめぼしのうたを読んでいると私たちの人生の姿と重なりますが、イエス様のお姿と重なるものがあるなと思わされました。梅が梅干しになっていく様子がイエス様が私たちを罪から救い出すために苦しめられて十字架につけられて復活されるそのお姿と重なると思うのです。**

**「しほにつかってからくなり、しそにそまって赤くなり、**

**七月八月あついころ、三日三ばんの土用ぼし、思へばつらいことばかり、それもよのため、人のため。**

**しわはよってもわかい気で、小さい君らのなかま入、うんどう会にもついて行く。」**

**特にこの部分です。**

**私たちのために苦しめられ鞭うたれて血に染まって赤くなり、十字架上で死を遂げられて三日三晩陰府に降り、そして復活された。その歩みを思えば辛いことばかり、それも世のため私たちのため、私たちを罪から救い出すために苦しめられて歩まれた、そして私たちとどこまでも共に歩んで下さる、そのようなイエス様のお姿と重なるのです。**

**「三日三晩の土用干し」「三日三晩の腹の中」「三日三晩の陰府の中」どれも私たちの人生において必要な時です。それは苦しみの時ですけれども恵みの時であり救いの時なのです。**